

ソファの上で膝を抱え、虚ろな目でテレビの画面を見つめる。

テレビはコマーシャルが放送ぎれでいて、軽快なリズムでお店の名前を連呼する歌が流れている。

歌に合わせて踊っているのは、アイドルだろうか…女性だ。知らない顔だが、もしかするとどこかですれ違っているかもしれない。これからは有名になるのかもわからない、見知らぬ女性はキラキラした笑顔を振りまいて踊る。一生懸命に踊る。チャンスを掴むために、爪痕を残すために、必死に、貪欲に、サーカスのピエロのように、人生をあがくように踊る。その滑稽な姿に、胸が締め付けられる。私もほんの少し前までそこにいた。ほんの少し前だ。ほんの半年…でも、もうはるか昔の出来事のように、実感が無い。



パシャパシャとカメラのフラッシュの光でテレビが明滅する。いつのまにかコマースィシャルは終わっていたみたい。一人の男が黒いスーツを着て現れたところだ。その男の顔に殺意がわく。男が話し始める。その声に身の毛がよだつ。たっぷりと憎悪をこめて、私はテレビを睨みつけた。

謝罪会見が始まった。

人気アイドルによる強制わいせつ事件：被害にあった女の子が誰なのかはわからない。それでも、私にはその事件の詳細が目には浮かぶようにわかる。忘れたくても忘れられないあの日のことが鮮明に思い出される。ざまあみろ、ざまあみろ、ざまあみろ、ざまあみろ。念仏のように、呪いのように、私はテレビの向こう側に語り掛けた。

「かな子ちゃん」

収録が終わり、控室へ戻ろうと廊下へ出たところで呼び止められた。振り返り確認する。声の主は先ほど収録で一緒だった司会を務めている山四角さん。

「どうしたのだろう、何か問題があったのだろうか。私はそれほどしっかりしている方ではない。たくさんミスをするし、皆さんに迷惑をかけることもある。心当たりはたくさんある。」



「ど、どうされました？何かミスを……」

少々テンパリながら返事をすると、山四角さんはパツと笑顔を作って「違う違う」と否定した。

「かな子ちゃんこれからまだ仕事あるの？」

特に何も無い。そう伝えると、これから出演者だけで番組の打ち上げをしようという話になって、それで声をかけたのだと聞かされた。どうしよう。今日は別件でプロデューサーは不在だった。

「うーん……すいません、今日は一人なので……」断るのは心苦しいが、またの機会にしてみよう。しかし……

「移動なら俺の車に乗っけてくよ、同い年くらいのほかの共演者もみんな来るからさ、これからの為にも親睦を深めるのも仕事のうちだよ。山四角さんは食い下がった。」

「それなら……よろしくお願いします」

番組の司会者のこの方は、日本人なら誰でも知ってるような有名なアイドルグループのメンバーで、ベテランだ。

ここまで言ってくれているのを無下にするわけにはいかない。多少不安はあったが、了承した。

「それにお菓子もたくさんあるよ」
前向きになった。

山四角さんの車に乗せられて着いたのは……どこにでもあるような雑居ビルの三階だった。

「ここですか？」
「ここです。」

私がそういうと、山四角さんは何を思ったか察してくれたようで、「共演者のみんな若い子ばかりだからさ、お店でやるよりみんなで持ち寄ってホームパーティーみたいにしたほうがいいかなって、知り合いに会議室みたいに使ってる部屋をお借りしたの。ごめん、先に言っておけばよかったね」と説明してくれた。

「いえ：あっ、でも私も用意してないですね」
「大丈夫大丈夫、かな子ちゃんがおかずみたいなものだから」

「？」

「フォロ―なのだろうか。わけがわからなかったが、曖昧に相槌を打った。」

「三村さん！よくきたね」

「やった！三村さんだ」

部屋に入ると、先に入っていた数名が出迎えてくれる。

共演者も、共演者じゃない人もいるようだ。みんな山四角さんの

事務所の……男の人ばかり。

今日出演した番組は、私と同年代くらいの女の子がたくさんいた

のだが、その子たちの姿はない。

「あ、あの……ほかの人は？」

まだ来てないのだからうか？それとも……

「ん？ああ、女の子？来ないよ」

こともなげに山四角さんは言い放った。

「それってどういう……」言いかけると、お菓子を差し出された。

「まあまあ、これでも食べて落ち着きなよ」渡されたフィナンシェを

半自動的に口に運ぶ。おいしい。

「あ、ジュースもつぐね」

「じゃあみんな、今日はお疲れーかんばーい」

打ち上げが始まってしまった。とりあえず渡されたジュースを飲む。

オレんジュース……？と思ったが、少し味が違う。何だろう、これ……

「喉乾いたでしょう、もっと飲んでいいよ」

「あ、ありがとうございます」

「やめっ はなしててくださいー！」
他の男の子たちも加わって、身動きが取れなくなる。
山四角さんの手がスカートの中へのび、パンツの上から執拗にこすりつけてきた。

セグー

いせおせおせー！

まずいまずい…逃げなきゃ！
逃げなきゃダメなのに！

「暴れるなって、それに逃げたら
大変なことになるぞ」
「アイドルが酒飲んで外歩いてたら
スキャンダルになっちゃうね」

酒…？あッ

「あのジュース…」
「自分の状況のみこめた？わかったらおとなしくやられなよ」

ガバーッ

に

に

「それに…オラツ！しっかり湿ってきてんじやねえか！」
え？え？
自分でも気付かないうちに、あそこが水気を帯びている。
どうしてかわからず、パミツクになる。

セグー

ふるふる…

ちゅ

ちゅ

ちゅ

「カマトトぶりやがって！本当は俺の手マンで
感じてんだろ！」
「違います！違う！」
必死で否定するものの、山四角の指が
パンツの中に入り込み、
私のおまんこを縦横無尽に愛撫した。
「う！う！う！う！」
声を殺そうとしても、山四角のイヤらしい手つきに声が漏れる。

今まで何人の女性をこの指テクで悶えさせてきたのだろう？
熟練の技の前に私はなすすべなく快楽を受け続けた。

「お前ばかり気持ちいい思いしやがって！新人の癖に生意気なんだよ」
そう言っつて制服を乱暴にむしり取り、ほかの男子と共に私を取り囲んだ。
ギンギンに勃起したおちんちんを私の眼前に突きつけ
「今度はお前が俺たちを奉仕しろ」と言い放った！

「で、できません…！私、初めてで、その…」
泣きそうになるのをこらえて、必死で説得を試みる。
「できないじゃすまないんだよ。芸能界甘く見てない？みーんなこうやって
男のちんこの握ってのし上がってんだよ！かな子ちゃんもアイドルなら
これくらいこなしていかなきゃこの先生き残れないの！」
めちやくちやな理屈で説き伏せられる。
ダメだ、この人は病気だ。（何を言っても無駄だと本能で察した…）

ビクン

い

わわ

わわ

い

わわ

ガバ

「もっと強くしこれよ！そんなんじやいつまでたっても終わらねえぞ」

「は、はい…：こうですか」

「よしよし、なかなか物覚え良いじゃない！さすが346プロ」

男たちの言うことを聞いて一生懸命手を動かした。

お願いだから、これで満足して！一縷の望みを託しておちんちんを擦りつづける

「出る出るっ！」

ようやく男たちは絶頂に達し、一斉に飛び出た精液が私の全身に降りかかった

びくっ

ぴゅっ♡

わわわ…

びゅー

びゅるるる

びゅ

びゅー



ビュン

「いやあ…」
「そんな固くなるなって、遅かれ早かれ
経験することだから、覚悟決めろよ」
山四角のおちんちんが私のおまんこに
入ってくる。
ゆっくりゆっくり、私の膣内を味わうように
膣壁をこすりつけながら埋没されていく

「い、いたい！いたい〜！」

一度も男性器を受け入れたことのない
処女まんこを、山四角の太いおちんちんに
よって押し広げられていく

それはまさに掘削作業のようだった

おちんちん

おちんちん…

ガタ

ガタ

アハハ…

アハハハ…

山四角は容赦なく、一心不乱にピストンを続ける。

「あぎい！いいいッ！あッ！あッ！あッ！」

「こわれりゅ！ああぐああ！」
「私が何か悪いことをしただろうか？もしかしたら収録で迷惑を描けたかもしれない、それでも、ここまで酷い目に合うほどのことをしたのだろうか？わからない！」

「おほ、出る出るッ！かな子、出るぞ、膣内に精液出るぞ！いいのか！かな子、おい！」

「ああ、うそ、うそ！ダメ！出しちゃダメ！」

「なんでダメなんだよ！説明しろよ！言わなきゃわかんねえだろ！」

「赤：赤ちゃん！できるから！ダメだから！おねがいします！おねがい！おねが！」

ズツツ
ズツツ

ズツツ

ああ...

うわあああ

わわわわ
わわわわわわ

わわ
わわ

「あ、無理。全部出たわ」
「ああ...うわああああ...」
「やっべえ！山四角さん鬼畜すぎでしょ」
「うっせえよ、後からちゃんとピル飲ませるから、次おまえらも中に出しとけ！」
「処女だから病気心配ないぞ」

セクシー

あーん
あーん

あーん

それから私はその場にいる男の子たち全員とセックスさせられた。
山四角の指示通りしっかりとひとりずつ膣内に出していく。
万が一妊娠しても自分以外の誰かに罪を着せる気でいたのだろうと
後になって思った。

全員が膣内に出し終わった頃には、私の膣は男たちのおちんちんの形に変えられ、セックスに快感を感じ始めていた。

「あっんあつ、も、もう家にかえしてえ」
「え？まだはやいでしょ、八時だよまだ！」
「全然やりたないから！早く帰りたいなら三村さんが努力してよ」

はぁ
はぁ

がく
がく

ズンズン

ずんずん
ちゅ

んんん
んんん

んんん

セックス

すっす
すっす

すっす

ズンズン

ずんずん
ちゅ

に
にに

「ほら、もつと回すほめて！」
「こつち！手をやすめるなよ、」
「使えないなあ三村は！」
「ひゅいまふえん、ひゅいまふえん…んおつ」
理不尽な罵倒をあびながらおちんちんを頬張る。

か
か

ん

ん

ん

か
か

ん

か
か

ぐ
ぐ
ほ
ほ

ぐ
ぐ
ほ
ほ

ぐ
ぐ
ほ
ほ

ぐ
ぐ
ほ
ほ

も
も

男たちは制処理だけでなく、溜まりにたまった鬱憤も処理するかの如く私にぶつけた。髪を引っ張られお尻を蹴られ、乱暴に扱われる。

「あひい、あつ、太いいい」
「すごい、三村かな子とやってる！かな子のまんこに入ってる！」
「お前そんなにこいつ好きだったの？悪いことしたな」
「発目やらせてやればよかったな」

ずるずる

ずるずる

パタン

パタン

ずる

ずるずる

ずるずる
ちゅちゅ

かの
かの
はあ

かの
かの

はあ

「かな子お！かな子おお！」
「あつ、あああッいやあああッ」

「気持ちいい！かな子のまんこ気持ちいい！」
「ああー！はああー！うああー」
「かな子！出すよ！膈内に出すよ！妊娠しろ！妊娠しろおおおお！」
「いやッ！いやあッ！いやだああッ」

ぎゅー
いー

ぎゅー
いー

かっ
かっ

かっ
かっ

びゅー
びゅー
びゅー

かっ
かっ

かっ
かっ

びゅー
びゅー
びゅー

ぎゅー
ぎゅー
ぎゅー

「はっはっは！」
「もうピルやらないから、妊娠したらお前責任とれよ」
「えー？それは嫌ですよ」



「くうっ たまらん…っ！」
「んおおお おっほおお」

「ちやんと膣出ししてやっからよ！孕めや

この淫乱アイドルッ！」

「いつひやああ！膣でっ！あッでてっ！

あッッひああッ」

「ははは！白目剥いて感じてやがるぜ」

びゅるるるる

ざっざっ

ざっざっ

ざっざっ

はあ

はあ

あーあー

あーあー

あーあー

あーあー

がっ

がっ

「ほれ、自分で腰ふれよ」
「は、はい…んっ、んっ」
「おっ、中々腰使い上手いじゃないか、見直したぞ」
「かな子はダンスやってるから」
「こんなことのためにレッスン受けてるわけじゃない」
「腐ってもアイドルだな」
「腐ってるのは…」
「ううっ、ぐうう…」
胸が苦しい。締め付けられる思いで、腰を振って、男を悦ばせて、こんな所で何をやってるんだろう。何でこうなっちゃったんだろう。

はあ

はあ

はあ

ずんずん
ずんずん
ずんずん

ずんずん

ずん

ずんずん
ずん



「やめて！はなして！」
「へへ、三村の嫌がる顔そそるわあゝ
もっと嫌がれ」

「もう嫌なの！帰して！帰してえええ！」
「駄々こねてんじゃねえ！ちっとは
頑張れよデブ！」

「あっ！うっ！うっ！うっ！うぐう！やべで…ッ」
「ほらかな子ちゃん、頑張れ！ファイト！」

「んっ、んぐっ、あっ！んあっ」
「おらあああ！ジャブ！ジャブ！
おチンコファイトクラブだ！」

「んおおおおっ」

ずっちゅ

かっ

かっ

ずっ

もみ
もみ

かっ

かっ

あっ

あっ

あっ



はあ

はあ

はあ

ずい

ずい

「やべでえええええ…」
 「やーめーなーい」
 「こいつウザイからマジで孕ませようか」
 「オツケー、一番奥で出してやるからなあ、
 お、おっお」
 「かな子ちゃん、誰の子かもわかんない
 赤ちゃん妊娠してアイドル引退してね！」
 「いやあッ」
 「イヤなら態度を改めろよ！」
 「お前の代わりなんてはいて捨てるくらい
 いるんだからな！孕んだって誰も助けちゃ
 くれねえから！」
 「ううっ、いやだあああ…」

かき
かき

びりびり

かき
かき
かき
かき
かき



「あああう、んああつ、あう」
 「おい、手の方もちゃんと動かせよ、聞こえてんの？」
 「なんか朦朧としてるな…やりすぎた？」
 「酔っぱらってるだけだろ？大丈夫さ」

「こうしてやると反応するぜ」
 小刻みに下半身を動かし、上下に揺すられた反動で
 子宮口に何度もおちんちんの先がキスする
 「お！お！おう、あおッ」
 「ホントだ。オットセイかよ」

はあ

はあ

はあ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

気付けば山四角の姿はなく、下っ端の男たちのおもちゃにされていた。写真も撮られ、無責任に腔内に精液を注がれ、凌辱の限りを尽くされた。涙も枯れ果てた。

「これ飲んで帰れ。他言したらどうなるか、わかるだろ？全力で潰すから」
錠剤を渡され、解放されたのは翌日の明け方だった。

この日の出来事がトラウマになり、それ以来仕事は休んでいて、誰にも理由を話すことができず、心配してくれる友人たちに合わせる顔もなく、ずっと部屋に引きこもって

そして、半年がたった。

